佐久間、お前もか！

グライガンワーン、〝日本人キラー〟の本領発揮。日本フェザー級王者の小野寺力に続き、全日本同級王者も撃破！

全日本キックボクシング
KICK OVER-Ⅷ
7月25日●東京・後楽園ホール

写真大：3R、掛け声もろとも右ミドルを放つグライガンワーン。[illegible]に乗った一撃だった　写真小：試合後、うなだれたまま控室へ戻ろうとする佐久間。自信満々だっただけに、敗戦のショックは大きかった

首相撲からの脱出に成功した佐久間だが右ミドルの嵐の前に…

◉日本・タイ国際戦3分5R（セミ・ファイナル＝第9試合）

（元ラジャダムナン・ライト級4位）

○グライガンワーン・オー・スィープワローイ［タイ、173㌢、57・61㌔、28歳］

（5R判定3―0）※採点＝50：48、50：47、50：47

●佐久間晋哉［八王子F、S.Q.所属、174㌢、57・61㌔、26歳］

（全日本フェザー級王者）

※キック・ルール（インターバル1分）、57・61㌔契約。

「見ての通りです。何もできなかったです。あんなに強いとは思わなかった」

試合後、佐久間はうつむきながら記者の質問に答え始めた。仕方あるまい。このところ佐久間は4連勝と絶好調。勝ち星を増やすたびに、自信をつけてきた。立嶋に勝った試合リポートで私が立嶋を中心に記事を構成すると、「布施さんは立嶋ファンなんですか？　俺ムチャクチャ頭に来たんですよ」と抗議してきた。

最初はビックリしたが、キックボクサーで噛みついてきたのは立嶋以来だったから、なんとなく嬉しくなってしまった。伸びてくる選手の中には、こういうタイプがいるものである。試合当日の午前中に行われた計量のとき、「調子はどう？」と聞くと、佐久間は不敵な笑みを浮かべてきた。もう、それ以上の答はなかった。

だが残念ながら、そんな佐久間をして、日本で4連勝中のタイ人の快進撃を止めることはできなかった。グライガンワーンといえば、首相撲からのヒザ使いの名手。とりわけ3月に小野寺の動きをヒザ蹴りで止めた一戦は記憶に新しい。

とうぜん佐久間は、このヒザ蹴りを十分に警戒。グライガンワーンが組みつこうとしても、すぐに腕のロックをふりほどくなど、相手の思い通りにはさせなかった。

だがヒザがダメなら、ミドルがある。グライガンワーンは佐久間のガードの有無にかかわらず、思い切り右ミドルを打ち込んでいく。

佐久間は右に回りながら、そのミドルにパンチを合わせようとしたが、左上腕部を蹴られていくうちに、自分自身のペースを見失ってしまった。グライガンワーンのミドルの破壊力は、佐久間の予想をはるかに上回っていた。

徐々に手数が減っていったことに関しては「気持ちの問題」と言う佐久間だが、セコンドの小林会長は「打つ気持ちは十分あったけど、途中から腕がいうことをきかなくなってしまった」と悔しがる。

1～2Rは距離をとりながら蹴り合い、相手のスタミナが切れる3Rからパンチで勝負する。それが佐久間の作戦だったが、ミドルによるプレッシャーを感じるのに加え、左のパンチが使えないとあってはどうすることもできない。

一方のグライガンワーンは、いつもと違ってスタミナにも余裕が感じられた。3Rから動きが悪くなり、4Rから守りに徹するようなこともない。途中から声を発しながらミドルを打ち始めたのも、バテたからではなく、蹴りに勢いをつけるためだった。

そういえば、この日の契約ウエイトは127ポンド（約57・61㎏）と、いつもよりちょっと多め。佐久間は「アイツ練習してないですよ」と指摘するが、もしかしたらいつもよりちょっと多めに練習したのかもしれない。

正直な話、外見だけで判断するならば、グライガンワーンは強いというイメージからかけ離れた選手。もともと猫背で、表情もおっとりしている。私服姿だと、線の細さだけが目立ち、むしろ弱そうに見えるくらいだ。しかし一度リングに上がるや、表情は猛々しくなり、強いムエタイ戦士に変身するのだから面白い。やはりタイ人を外見で判断したらいけない。現役の日本王者を倒したことによって、グライガンワーンは完全に〝日本人キラー〟の称号を手にした。

「自分のスタイルがわからない」と悩む佐久間だが、日本人として初めてグライガンワーンの首相撲から逃れることに成功したことは事実。このまま〝ムエタイの迷宮〟にだけは迷い込まないでほしい。まだまだ、やるべきことはたくさんあるのだから。

（布施）

○おどけたポーズ（？）で佐久間の登場を待つグライガンワーン

花道登場の直前、精神統一を図る佐久間。6月には短期間ながらタイ修行にも出掛け、仕上がりは順調そうだったが……

佐久間対グライガンワーン戦の前に、7月20日、K－1ナゴヤドーム決戦に出場した土屋が登場。笑顔で勝利報告を行った

○新調したガウンで登場してきた佐久間。その姿はチャンピオンの風格を十分に漂わせていた

○グライガンワーンのヒザ蹴りも振りほどく佐久間。「首相撲は思った以上（にかわせた）。でもあれだけじゃ何にもならない」

○相手のヒザ蹴りをほぼ防いだ佐久間だったが、3Rには一度背中を見せてしまう場面も。このあたりから試合の流れは完全にグライガンワーンに傾いてしまった

この勢いは誰にも止められない!?

小野寺戦で日本人の弱点を掴んだのか、この日もグライガンワーンは終始アグレッシブに佐久間を攻め込んだ

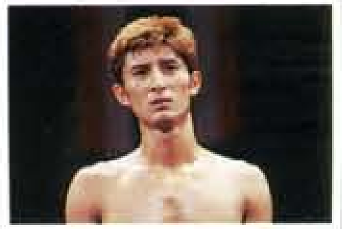
ジャッジ	宮下　傑		少　白竜		諸星　魁	
R＼選手	佐久間	グライガンワーン	佐久間	グライガンワーン	佐久間	グライガンワーン
1R	10	10	10	10	10	10
2R	9	10	9	10	10	10
3R	9	10	9	10	9	10
4R	10	10	10	10	9	10
5R	10	10	9	10	9	10
計	48	50	47	50	47	50

○グライガンワーンのハイが容赦なく佐久間を襲う。この日はミドルとともにハイの切れ味も鋭かった

○4R、コーナーに詰められた佐久間は、苦痛の表情を浮かべながら右ミドルをブロックする

○試合終了のゴングが鳴ると、佐久間はロープにもたれかかったまま、悔しそうな表情を浮かべる。「（向こうの）うまい点？　全部です。K－1の話？　きていないです。あんな奴に勝てないようじゃ、K－1なんかいいですよ」

○5R、必死になって反撃を試みる佐久間だったが……。「本当にうまいっすね。アイツは。俺よりも手が長いし」



全日本キックボクシング
KICK OVER-Ⅷ
7月25日●東京・後楽園ホール

吉野弘幸、全日本キックのプロテストに合格！

今大会のリング上で挨拶した〝時の人〟吉野弘幸が2日後の27日、K－パブリックジムで全日本キックのプロテストを受験。筆記試験を満点で通過したあと、パンチ、キック、総合（パンチ＋キック）をそれぞれ1分ずつ行う実技試験（スパーリング）に挑んだ。「スパーをやるのは8ヵ月ぶり」という吉野だったが、さすがは元OPBF王者。パンチ力には関係者の誰もが息を呑んだ。だが「今まで一度も練習したことがない」というだけあって、キックだけの攻防になると防戦一方を余儀なくされた。結局、テストには合格したが、吉野は「もともとチャンピオンだった頃も、スパーでは4回戦の選手に倒されていた。俺は実戦で強いタイプ」と不安はない様子。今後は得意の「左」の威力に磨きをかけながら、蹴りの防御を学び、9月7日のデビュー戦に挑む。

なおこの日のプロテストは受験生のレベルが高く、吉野も含めた12名全員が合格。中には6月にMA日本キックのリングで村上竜司を破ったホマヨン・ゴールギン（日本格闘館）の姿もあった。

○基礎体力試験は免除。筆記試験は100点満点だった

○佐藤茂和（国士舘）のミドルを本能でブロックしようとする吉野（右）。今後、チャーンや清水隆広の指導を受けるという